



ザルツブルク音楽祭に出演したイゴール・レヴィット。知性溢れるプログラミングと心揺さぶる演奏に聴衆は魅了された  
Solistenkonzert Levit 2022 Igor Levit (Klavier) ©SF / Marco Borrelli

## イゴール・レヴィット in ザルツブルク ニュー・アルバム『トリスタン』を引っ提げ、いよいよ日本へ！

8月24日、満席のザルツブルク音楽祭

劇場が息を呑むなか、すっかり音楽祭の顔となったイゴール・レヴィットは、バルトーク《戸外にて》から今宵のプログラムを慈しむように弾き始めた。無声映画のような描写を魅せた5曲は、特に「夜の音楽」が印象的だった。バルトークの後のシューマン《森の情景》はロマンティックな優しさが際立ち、ピアノで語る詩人のようだ。転じてワーグナー《トリスタンとイゾルデ》前奏曲はオーケストラのような壮大なフレージングで、編曲者のゾルタン・コチシュが聴いたらさぞ喜ぶだろう。強靱な集中力で弾き終えると、そのまま気持ちを途切れさせずにリスト「ソナタ」口短調へ入ってしまった。この義理の父子の曲が一つの大きな世界を構築して終わると、聴衆は立ち上がった。拳を掲げて感極まったりする騒ぎ。5回目に呼び出されたとき、シューマン《子供の情景》から《詩人は語る》を弾いたが、頭の中は「トリスタン色」に染まったままだった。



翌日のインタヴューには白いTシャツで現れ、この後ヨガスタジオに行くのだという。昨晚の気持ちを聞いてみた。「とてもよい気分で弾きました。この街が好きだし、ここで弾けることが嬉しかったです。でも弾き終わったら、過去のことは忘れてしまうので、よく

眠れました」

曲順による効果は意図的かと聞くと、嬉しそうに、「登場してすぐに、バルトークでパンパンかき鳴らすのは爽快です。その後のシューマンは効果的だったでしょうか？ ワーグナーがオーケストラ的アプローチだと言ってもらえたのは嬉しいですが、それをどうやって実現させたのかは僕にもわかりません。オペラ《トリスタンとイゾルデ》はよく観ているので、そのときのオーケストラ・サウンドを想像しながら弾いています。マエストロ・コチシュには会えるチャンスがあったのに、実現しないうちに亡くなってしまったのでとても残念です。リストの「ソナタ」を続けて弾いたのは、ちょうど《トリスタン》の終わりのように始まる曲なので、ここで切っていたら、エンディングを2回弾くようになってしまうからです。そのまま続けることによって、一つの世界を作れたのです」

9月21日発売の新譜「トリスタン」では、ヘンツェ《トリスタン》も聴ける。正確にはこの曲がメインなのだそう。

「僕は特に夜の描写が好きで、この愛と死と恐れの入り混じったヘンツェの名曲を、もう3〜4年も前から録音したいと思っていました。僕はピアノ作曲家でなくても、自分が身近に感じる作曲家の作品は弾きたいので、いろんな手を使って実現させようと思います。





公演翌日、インタビューに登場したレヴィット。来日公演への想いからヨガへの傾倒までも、和やかに自身の「現在地」を語る

■公演情報

イゴール・レヴィット  
ベートーヴェン ピアノ・ソナタ・サイクル・イン・ジャパン I & II (全4回シリーズ)  
〈日時・会場〉①11月18日19時  
②11月19日14時・紀尾井ホール  
〈曲目〉①ベートーヴェン「ピアノ・ソナタ第1、12、21、25番」②ベートーヴェン「ピアノ・ソナタ第5、19、20、22、23番」  
〈問合せ〉ジャパン・アーツぴあ  
0570-00-1212



最新アルバム「トリスタン」ではテーマそのものをオペラの主人公「トリスタン」としたレヴィット  
©Felix Broede



「トリスタン」  
〔演奏=イゴール・レヴィット(p) / 曲目=リスト「(愛の夢)第3番」、ヘンツェ(トリスタン)、ワーグナー(コチシュ編)「楽劇(トリスタンとイゾルデ)前奏曲」、マーラー(スティーヴンソン編)「交響曲第10番」〜アダージョ、リスト「夕べの調べ」〕  
ソニー・ミュージックから好評発売中  
[S-SICC30609〜10]

取材・文 中東生

最後に、ロシアからドイツに移住したユダヤ系であり、ウクライナのためにオンライン・チャリティコンサートで募金を集めるなど、人道活動家の顔も持つ彼に、私たちはこの戦争に対して何をすべきか聞いてみた。「ピアノリストとしては僕も何もできません。ただ一人の人間として、目の前の困っている人を助けたい。それだけしかできません」と語気を強めた。

これからも、たとえばマーラー「交響曲第6番(悲劇的)」など、自分の好きな曲を演奏していきたいし、編曲版がなければ、自分でアレンジするでしょう」  
このアルバムはまさしくコロナ禍直前にヘンツェを、そのほかをロック・ダウン後に録音した。その差を自分でも感じるのだろうか。  
「僕は自分の録音をいつさい聴かないのでなんとも言えませんが、コロナ後の録音は、コロナ前とは違ったアプローチになったと思います。新型コロナは誰にとっても大きな変化でしたが、僕にとっては貴重な体験でした。たいへんな日々ではありましたが、芸術的に自由になれ、聴衆に生で聴いてもら

えるありがたみも知りました。それまで僕はストレスフルでしたが、平穩を得られ、親密な感覚も得られ、真実とは何かを悟りました。3月12日から、ベルリンのアパートに人を呼んで、52日間、Twitter上でオンライン・コンサートを続けたのですが、お金を集めて困っている人たちを助けたもの、オンライン演奏会によって自分も力をもらっていたのです」

みなのですが、日本ではよい気持ちで弾けます。16歳のころ、浜松国際ピアノアカデミーで初めて日本へ行った際の冒険的感覚をよく覚えています。僕はお米が大好きで、9キロも買って帰国しました。お茶も好きで、日本の抹茶や緑茶があると幸せです。2017年のバイエルン州立劇場ツアーも、2019年の東京・春・音楽祭でも、ストレスフルな僕だったので、今回バランスの取れた状態で日本に行くことができるので楽しみです。2〜3カ月前にすばらしいヨガの先生に出会い、毎日8〜9時までヨガをやっているからです。そのおかげで、呼吸を学び、イライラしやすい自分の均衡を得ることができたと感じます」